



特集

平成17年度新版教科書Ⅲ

— 言葉と向き合う —



言葉への信頼を育てる

もりやま
森山 卓郎

コミュニケーションの根底を支えるものの見方や言い方への注意も大切では



森山卓郎（もりやま たくろう）

一九六〇年、京都府生まれ、京都教育大学教授、光村図書国語教科書編集委員、主な著書に、『ここからはじまる日本語文法』（ひつじ書房）、『表現を味わうための日本語文法』（岩波書店）、『コミュニケーション力をみがく、日本語表現の戦略』（NHKブックス）など。

「小学校の英語教育が具体化されようとする中で、子どもたちの言葉の力は、**今、どのようにとらえられるのでしょうか。**」

日本の社会には、「言わぬが花」みたいなところがあって、日本人は海外の方々とのコミュニケーションがうまくない、と以前から指摘されてきました。土壌としては、言葉を通してコミュニケーションを図っていく意識が薄かったわけで、言葉への信頼がもとも小さいのかなという気もしています。そうした背景もあり、英語教育の必要性が問われてきたと思うんです。しかし、国際社会でコミュニケーションをうまく進めるために、「何を」「いかに」話すか、あるいは、自分なりの考えをいかに作るかというトレーニングがあまりなされていないように映ります。実は、こうした風土から切り離された英語教育は、あまりうまくいかないと思うんです。

私が小学生のころ、万国博覧会があって、世界のおまわりさんが学校に來れることになったんです。そのとき、校長先生がお話されたことが英語教育を考えるうえで示唆に富んでいると思います。校長先生は、「君たちは、絶対に生半可な英語を使わないでください。」とおっしゃいました。例えば、出会った人に「Where are you going?」といきなり声かけをすると、意味は通じるけれども場合によっては失礼になるそうです。このように、英文法としては正しいのですが、コミュニケーションとしての配慮が必要になることがあります。

校長先生は、おそらくそんなお考えだったんじゃないかな、と思うんです。つまり、コミュニケーションのしかたに関する意識も大切で、皮相的な英語教育では十分ではないということなのでしょう。もちろん話す中身をつくることも大切です。コミュニケーションや自分の文化のパターンを相対化して学ぶことも大切だという気がします。そういう経験をすること、子どもたちの言葉の力とは微妙に絡んでいて、必要なときに、自分の言い方でしっかりものが言える子、書ける子を育てていくことが必要だと思います。コミュニケーションの力は、本来、日常生活の中で親子や友達のやりとりを通じて練れていくものですが、そうした機会が今の時代は少なくなっています。結果として、コミュニケーションの根底を支えるものの見方や言い方に對する注意が抜け落ちていて、それがいちばん大きな問題ではないかな、と思います。

「教育現場では、『学習指導要領』の『言語事項』と同じような意味合いで『言語』をとらえられているように映ります。」

そもそも、「言語事項」という言い方が言葉を矮小化するという誤解を与えやすいような気がするんです。文字であれ、説明文であれ、作文であれ、基本的に言葉を使っているわけですから、言葉を取り出して指導する場が必要だと思えます。例えば、今こうして座っている状態を表現する場合、「座っている」と言つか、「腰かけている」と言つか、それとも「腰をおろしている」なのか。どれを使ってもよいのですが、最終的には一つに決めないといけない。そのことは、何かを表現する場合も文学作品も同じことです。

よく現場の先生方で、「言語事項のコラム、おもしろいです。」「とおっしゃっ

すべての学習に生きる
「言語」の学習を

もっと言葉と遊ぼう、
楽しもう

てくださる方がおられます。そこでの学習は、子どもたちが生き生きすると話される先生もいらつやいます。ほんとうにありがたいことです。すべての学習活動が言語の学習活動のはずで、「言語事項」はその楽しい入口になれば、と思います。ただ、それが言語の学習のすべてではないとも思います。

― 光村図書の新しい教科書では、「言葉っておもしろいな」という単元を設けていますね。

作品を読む学習のなかでは、言葉についてどうしてもカバーできない部分もあると思います。言葉を楽しむということは、一つの単元を取り立てて、意識化しないとうしてもできないと思うので、あえて特化した単元を設けています。例えば、「言葉遊びの世界」(四年)では、言葉と遊びながらおもしろいな、とぜひ感じてもらいたいのです。

子どものころ、遠足に行く途中、みんなで歩きながらしりとりをしたことがあり、それがとてもおもしろくて、いい思い出になっています。言葉と楽しむことは、言葉への関心をもつ大きなきっかけになるはずです。作品を読むときのように、登場人物の気持ちにはならなくていい。漢字ばかりに注意を払わなくてもいい。そんなゆとりや楽しみが言葉を学ぶうえですごく大事な、と考えているんです。国語の時間で触れる言葉が、日常生活から遊離したものばかりになってはいけません。そんなに肩ひじ張らずに、もっと言葉と遊ぶうとか、楽しもうみたいなとらえ方があっていいと思うんです。

さらに、こうした単元を通じて文体の違いや方言に触れることは、地域の言葉を見つめ直し、自分たちが住む地域の言葉を見直すことになります。それは

自分が属する文化を相対化し、外に対してオープンになっていくことです。言葉を通じて文化を考え、より適切な文体を考える。これは作文教育とも関連すること、やはり教科書に取り上げなければならないと考えています。

― 言葉への意識を高めるためには、実際に、どのようにすればいいのですか。

言葉にこだわることから
「発見」が生まれる

例えば、読解でいえば、「なぜ、ここであんなに言葉が使われているの。」「と先生が取り上げて、みんなで意見を出し合うことは大切だと思います。

私が小学生のころ、先生から、「このときのこんの気持ちはどうだったの。」「と尋ねられたことがあります。その授業は正直言ってつまらなかった。その質問はもうわかりきったことでしたから。逆に、うちの子どもが小学四年生のとき、「こんぎつね」を読んで、「こんのことでクラスで話したんだ。」と喜んで言っんです。ほかの子たちと解釈が少し違っていたので、みんなで話し合ったことが、とてもおもしろかったようです。こつこつ読みもあるし、ああいう読みもある、という詳細な読解は必ずしも否定されるべきではないと思います。ところが、往々にして多いのは、もうわかりきったことを問いかけたり、人物の気持ちはこうである、と黒板に書いたりする授業で、そこには、ひと言で言う「発見」がない。「発見」がない読解ほど退屈なものはないでしょう。その「発見」の二つの手がかりが、きつと言葉だと思います。なぜここでの言葉が使われるのかと考えることで、これだけの発見があるんだということを、どんな試みてほしいんです。

ある先生の音読の授業を拝見したとき、「何々なの」って書いてあるのを、あの子どもが「何々なの?」と上昇イントネーションで読みだしたんです。どち

言葉への思いを深め、広げ、好きになってほしい

らがいいのかみんなの中で話題になったわけですが、先生は、子どもたちに考えさせていました。子どもたちはすっかりとした言葉への意識をもっているんですね。そうした子どもたちの「発見」する力も、決して見くびってはならないと思います。先生方は、子どもたちの本当に素晴らしいこの力を上手に育てていただきたいと思います。

—言葉を好きになるためには、小学校六年間の中で、どのようなことに気をつけて指導していけばいいのでしょうか。

入門期は、とにかく言葉に触れる喜びが大事です。一年生の子どもたちは、字が読めるようになることがすくうれしいから、喜んで音読しますね。あの喜びって、一生持ち続けてほしいなと思います。書く喜び、読む喜び、話す喜び、そんな喜びをぜひ大切にしてほしい。

中学年の場合は、ある種の「組みかえ」が起きてくると思います。ただ単におもしろいというのではなくて、一つの言葉の奥にあるものを考えたり、これはどういう意味だろうと想像をしてみる。あるいは、もっとうまく言えないかなと考えたりして、言葉に対しての意識を深めていくことが求められます。「ちいちゃんのかげおくり」(三年)でいえば、「お母さんの声も、青い空からふつてきました」という表現に対して、なぜ「ふつてきた」という言葉が使われているんだろ、と子どもたちに問いかけてみるのが大切ですね。ここでの声は、単に聞こえる声とは違うんだろ、そういうところにしっかりと引っかけ、子どもたちが「発見」できるような授業をしていたきたいです。いわば「無意識」になりがちな言葉を少し意識することで、言葉への意識のもち方を組みかえていくことが大切だと考えています。

高学年になると、言葉への意識を深めると同時に、「広げる」ことが必要です。古典や俳句、韻文や短歌とさまざまな分野の作品と出会うことは、必ず言葉への意識を広げます。読み物も自分のいろんな興味に合わせて読んでもらいたいです。教科書から飛び出して、総合的な学習に発展していくこともできるでしょうね。

—言葉を意識していくときに大切なことはなんでしょうか。

言葉は社会的なもの、とよく言われますが、ベースにあるのは個人的なものだと思います。言葉のベースにある自分のいろいろな思いを、やはり無視できないのではないのでしょうか。例えば、戦争で何十人の人が死亡したというニュースを聞いたときに、「ああ、そうか、戦争なんだ。」と、それだけ感じて通り過ぎてしまつのと、「死亡」という言葉を聞いて、「えっ、どういうことなんだ。」と自分なりの考えや経験をしっかりとって、言葉に接していくことは、まったく違うものです。言葉を、単なる記号ではなく、そこから現実を想像したり、奥にある論理を鋭く自分なりに考えてみたりすることが大切です。そういう言葉について意識的になることや、言葉のあり方について自分なりの考えや経験をもつことが大事です。そして、そのことが「自分の言葉を見つける」ことだと、私は思います。どうか先生方も、子どもたちといっしょに、いい言葉の経験をいっぱいしていただきたいですね。

言葉のあり方について
自分なりの考えや経験を
もつことが大事